お面は語る

毘沙門の面

毘沙門の裏面

現在三都橋地区で行われている参候祭には、十種類の面が使われている。中心となるのは江戸時代に栗島の大工羽賀源兵衛が彫刻したとされるものである。

源兵衛は、「寛延二年巳九月吉日」「栗嶋　大工　羽賀源兵衛　九面打」と毘沙門の面の裏に刻んでいる。

※寛延二年（一七四九）

弁財天と福禄寿の面は、明治時代に豊邦の松井孝右衛門から寄贈されたものが使われているが、他の七福神と不動明王は源兵衛の彫刻したものを使用している。

九面とあるのは、以前使われていた弁財天、福禄寿を含めた七福神と不動明王、それにいつ、どのような役割を演じられていたのか不明の面を指すと思われる。この面の裏には「翁」と墨書されている。

翁面

すべての面に源兵衛の名が刻まれているわけではないが、いずれの面も朴の木と思われる材を用い、胡粉地に白、緑、朱などの色漆が塗られ、黒や朱などの漆を用いて目や眉、口などを描いている。また、目や眉、口などの表現が似通っており、同じ作者のものと推定される。

さて、以前弁財天として使われていた面の裏には「女郎」の文字があるが、「翁」と共に参候祭には登場しない役名である。

隣接地区の田峯の田楽には「翁面」「女郎面」「さいはらい面」「殿面」「駒」「獅子」が存在する。（熊谷好恵著・田楽と三番叟より）

黒倉田楽でも「一の鍵取り」は、別名「ひのねぎ」と言われ「殿面」をつけて登場する。「松風丸」は別名「おじょろう」または「みこ」と言い、「四寸の鍵取り」は別名「おきな」という。この後「獅子」や「駒」が登場する。（黒倉田楽次第より）

さいはらい面、殿面は参候祭にも登場する。

さいはらい

さいはらい面の裏には「寛永四年」の墨書があり、七福神の面より古いものであることがわかる。

※寛永四年（一六二七）

源兵衛が「女郎」や「翁」の面を七福神の面と同時に作っていることは、田楽と七福神の舞が同時期に演じられていたことを物語るのではないだろうか。

「女郎」や「翁」がいつまで演じられていたかは分からない。

参候祭の面には現在も使われているもの、使われなくなったり用途を変えたりしたものがあるが、田楽との結びつきを示すものが多く含まれている。

「駒」という演目では、田峯田楽での「羽織」の台詞と参候祭の「禰宜」の台詞が非常に似通っている。同じ系列の田楽祭として参候祭が受け継がれてきたことを伺わせる。

いずれにしても、参候祭が田楽の要素を含みつつ、江戸時代には七福神と禰宜の問答へと変遷していった過程を面たちが伝えてくれている。

（設楽町文化財保護審議委員　平松　博久）